第23回

【特別対談企画】

祖母から受け継ぐ「女の武士道」。「公の精神」を再び日本人の美質に

作家 石川 真理子 氏

日本の首都・東京。その知事は、わが国において重要な公職の一つです。都民の直接選挙で選ばれている上に、中堅国の国家予算に等しいお金を動かすことができることから、都知事には一国の元首に匹敵する高いモラル、人の上に立つ人間にふさわしい「公の精神」が求められます。

しかし、6月に辞職した舛添さんの公私混同ぶりには開いた口がふさがりませんでした。知識を高めつつ品性も磨くことを「修養を積む」と形容しますが、今の政治家に「修養」や「公の精神」、道徳心を期待するのは土台無理な話なのかと、ため息が出る思いでした。

今回、対談をお願いした石川真理子さんは、仙台藩士、米沢藩士をルーツに持つ武家の血筋で、かつての武士の家の家風や女子教育にも詳しい作家さんです。石川さんに、いつの頃からか日本人が失ってしまった品格についてお聞きました。リーダーがおろそかにしてはならない心得として、お読みください。

幼少期の祖母の教えが原点

〈畠〉 石川さんの著作である『女子の武士道』、『女子の教養』（致知出版社）を読む機会があり、根底に今の日本に対する憂いを強く感じるとともに、共感や感銘するところも多々あったものですから、今回、対談をお願いした次第です。

〈石川〉 ありがとうございます。

〈畠〉 ご出身はどちらですか？

〈石川〉 生まれは東京・品川です。祖父が元仙台藩士、祖母が元米沢藩士の家に生まれていまして、私は米沢と仙台の武家の末裔ということになります。

〈畠〉 米沢藩は上杉家、仙台藩は伊達家ですね。米沢藩では藩政立て直しの治績がたたえられる九代藩主・上杉鷹山が、仙台藩では独眼竜と称された藩祖・伊達政宗がやはり有名です。両家とも武門の誉れ高い戦国の名門です。

〈石川〉 私が影響を受けたのは祖母で、明治二十二（一八八九）年の生まれでした。ちょうど大日本帝国憲法が発布された年に当たります。明治半ばに生まれた祖母と私は昭和五十年代前半、十二歳まで一緒に暮らしました。大家族の中心に祖母がいました。

威厳のある人でしたが、私は怖いとはちっとも思わずに、退屈を感じると祖母に相手をしてもらっていました。祖母の近くにいて礼儀作法や言葉遣い、日常生活での心掛けなどをしつけられました。そこで耳にした言葉の数々が、私の中に残っていきました。

〈畠〉 石川さんは、おばあさまの武家の教えをずっと聞いていたのですね。

〈石川〉 ええ。さらに、祖母が晩年になって骨折で入院していた時に手記をしたためています。祖母の死後、私の父がワープロで文書をデータ化し、出力紙の複写を何部か残していました。父はそれを私が二十代半ばの頃に託してくれました。

〈畠〉 当時はどんなお仕事を。

〈石川〉 大手出版社の編集プロダクションに勤めるライターでした。バブル経済の余熱がまだ残っていた時代で、私にとっては違和感を抱いてばかりの風潮でした。

「物より心を大事にしていきなさい」という価値観の中で育ちましたから、第一線で活躍する女性の方々にインタビューをする機会もあったのですが、女性のあり方について考えずにはいられませんでした。

〈畠〉 環境が違いますよね。石川さんはある意味、明治の教育を受けていたのですから。一方、バブル期は日本人が拝金主義にまみれた最たる時代です。

〈石川〉 はい。それで、既にこくなってはいたのですが、凛とした生き方をしていた祖母に学びたいと思うようになったその頃に、父がこれをお前にまだ渡してなかったから」と、くれたのが祖母の手記でした。

〈畠〉 私が読んだ三冊の原点にあたるものですね。

武士道を貫く「公の精神」

〈石川〉 その手記があったから、祖母がどういう人生を歩んできたかということが理解できました。

断片しか書いていないようなところは、大正元（一九一二）年生まれの祖母の長女、つまり私の伯母に聞いてエピソードや意味を補完し、全貌を明らかにしました。そして、それをもとに『女子の武士道』を執筆しました。

〈畠〉 なるほど。私は、男女を問わず、今の日本人に一番欠けているのは、道徳とか修身といったことではないかと思います。

今朝、金沢駅のホームで東京行きの新幹線が回送されてくるのを待っていました。八時四六分発の新幹線だったのですが、その時間帯にホームの待合室で周囲を気にせず化粧をしている女性や、ガムらしきものを噛んでクチャクチャと口を動かしている女性がいました。そうした姿を見て、日本はいつからこうおかしくなったのかと、絶望的な気持ちに陥りました。

家から一歩外に出たら完全に外の世界です。でも、そんなことを理解できない「心」の乱れは、今の教育がもたらす大きな問題点なのでしょうね。

「日本の心」を一言で表すとすれば、「公の精神」ということになると思います。「私」ではなく「公」です。

なぜか、簡単に言えば、自分のをせは他者の喜び、幸せの上に成り立つものだから、自分がたとえ辛抱をしたり辛い思いをしたりしても、他の人の幸せのために、辛い時でも微笑んで見せる。それが巡り巡って自分の幸せになるということを私たちの先人は皆、知っていました。

〈畠〉 武士の存在とも関係がありそうですね。

〈石川〉 武士というのは「公」の立場です。全人口の一割にしか満たない特権階級が日本人の手本になる。そのために、「私」というものをどこまでも捨て去っていったわけです。それが結局、江戸の中期以降に、寺子屋であるとか、出版文化とか、いろいろな形で庶民にも浸透していって明治人を育て、少なくとも戦前までは「公の精神」は継承されていたと思います。

しかし、敗戦後は個人主義が横行しました。「私」が重んじられて、個人の主張ばかりする一方で、責任や義務が置き忘れられているように感じます。

明治に清貧を貫いた勝海舟

〈石川〉 日本人が本来持っていたはずの美質の喪失は憂慮すべき問題です。その解決のヒントになればと、今年三月に致知出版社から上梓した私の著作を持って参りました。『勝海舟修養訓』という本です。

〈畠〉 江戸城無血開城の功績や坂本龍馬の師として勝海舟は有名ですが、晩年は放言が過ぎて大法螺吹きと呼ばれていたと記憶しています。死に際の言葉が「コレデオシマイ」など、ユニークで憎めない人物ではありますが、修養

〈畠〉 戦後、日本が右肩上がりで経済成長を遂げていた昭和三〇年代までは、多くの国民に「わが愛する日本のために」「わが愛する家族のために」といった帰属意識や責任感が満ち満ちていました。しかし、所得向上の弊害として核家族化が進み、帰属意識が希薄化したことが、個人主義の増長や家庭内での教育力の低下も招いたのではないかと考えます。

や道徳とはちょっとかけ離れたイメージですね。

〈石川〉 実は勝海舟に関して、私は皆さんとはちょっと違う見方をしています。勝は人への見ていないところで非常に努力しました。貧乏をしながらも高い精神を保っていました。武士でありながら江戸庶民に心を馳せていた、寄り添う「公」の心を持っていました。勝は将軍家はもとより庶民をも救済しようと文字通り駆けずり回ったのです。

維新後は明治の元勲と言われる人たちが豪邸を建てて、西洋の人たちと付き合うためにという大義名分のもとで、非常に贅沢な暮らしをしていました。でも、その一方で勝は官職を持たながらも、あくまで一汁一菜、せんべい布団の上に座って、清貧の生活を貫いたのです。

〈畠〉 すごい人ですね。

〈石川〉 幕府がなくなって食うや食わずになってしまっている士族を彼は支援していました。例えば、自分のかつての目上の人たちに、大金だと彼らにも意地があって受け取ってもらえないから、小銭をちょっとずつ包んで置いたんん）の情」というものがあります。これは女性に当てはめた場合、憐れみの心をいかに持てるかです。昌さんのおっしゃられた慈愛です。慈愛とは母の愛に言い換えられるのではないでしょうか。我が子のためなら命をも投げ出す、尽くす心なのです。

女性というのは、尽くす存在だと思います。自らを捧げて尽くす中から自分の幸せを得ていくのではないでしょうか。男性もそうかもしれませんが、女性はよりそちらが強い。

人に尽くすことは、自分をなくすことではありません。究極の無私というのは、自分がはっきりとしていなくてきないのです。家族や大切な人のために尽くす中から自分らしさというものが、かえって出てくるのだと私は思います。

〈畠〉 見返りを求めない。

〈石川〉 見返りを求めると、かえってつらくなると思います。尽くすことそのものを喜びとできるようになりたいですね。

〈畠〉 最後は自分に返ってくるわけですからね。

〈石川〉 そうして真に幸せな女性が増えていけば、世の中がだれだけ明るくなるか知れません。

〈畠〉 なるほど、女性の修養の根幹が多少なりとも理解できました。

本日は示唆に富む素晴らしいお話をたくさんしていただきまして、誠にありがとうございました。石川さんの今後のご活躍を期待しております。

〈石川〉 こちらこそ、ありがとうございました。

【Profile】 石川 真理子氏 作家

いしかわ まりこ。1966年東京都生まれ。祖父方が仙台藩士、祖母方が米沢藩士という武家の家系に生まれ、明治生まれの祖母から武家に伝わる薫陶を受ける。文化女子大学（現・文化学園大学）卒業後、大手出版社の編集プロダクションに勤務。結婚後は広告・雑誌・書籍における文筆活動のほか、出版プロデュースを手がける。また、武士道や武家の生活文化を独自に学び、忘れられた「婦道」について執筆やセミナーなど啓蒙活動を続けている。主な著作に『女子の武士道』、『女子の教養』、『勝海舟修養訓』（以上、致知出版社）、『新島八重 武家の女はまつげを濡らさない』（PHP研究所）、『明治女が教えてくれたプライドのある生き方』（講談社）など多数。

てくるのです。しかも、木綿のボロを着て。

私は、勝海舟のこの姿に日本人の姿、本当の志というものを見るのです。戦後日本経済を作り上げた経済人の中にも、そういった人がいました。

〈畠〉 土光敏夫さんが有名ですね。メザシの土光さん。

〈石川〉 でも、そうした感性や思想が、世代交代が繰り返される中で今の経営者の方々に受け継がれているのか、少し心配になるところもあります。

〈畠〉 うーん、なかなか痛いところですね。

寛容や慈愛が日本人の美質

〈石川〉 「父から子へ」の承継は大事ですが、常に子の身近にいるのは母親です。女性が社会の根を育てる役割を担っているのです。私の祖母もその父親である曾祖父から「女子（おなご）がでたらめになったら、世の中がでたらめになる」と言われて育っています。だから、祖母は気概を持って、女性として立派に生きようとしたわけです。

〈畠〉 私もいろいろなクライアントの経営や事業承継を見ていて気づくのは、要を握っているのは、やはり女性であるということです。女性社員がしっかりしている企業は伸びています。

ただ、女性の社会参加はいいのだけれど、果たして男性と一括りでいいのかなということは、気になっています。石川さんは現代女性やその取り巻く社会環境、制度をご覧になってどうですか。いい悪いはもちろん、いろんな意見もあるでしょうが。

〈石川〉 女性らしさ、男性らしさを否定することは社会の歪みに通じると思っています。こういうことを男性が述べるとたちまち女性から「男尊女卑的な見方だ」と過剰反応されますから、あえて私が女性の立場で強く申し上げます。

男性と女性の役割が違うということは、大宇宙、大自然の法則です。生物的な生成発展の中で出来上がった仕組みです。

それを現代人特有の価値観や都合によって否定することに問題を感じます。

〈畠〉 少子高齢化が日本社会を覆うのも、日本的な道徳や修身、倫理の後退が影響しているのでしょうね。

〈石川〉 根はつながっていると思います。日本人の倫理観、道徳、日本人のあり方そのものを否定したところからそうした現象が始まっていると考えます。

目標や志を達成することは素晴らしいことですが、私はそれ以上に大切なのは、それを求める姿勢そのものであると思っています。何事にも生きている限り努力をしていく。そうしますと、他者に対して寛容になれるのではないでしょうか。人に対して優しくなる。慈愛を持って接することができるのです。

〈畠〉 寛容は、日本人の美質の一つですよね。

女性らしさが男を育てる

〈石川〉 勝海舟は「あらゆる英雄は、日本の女子、婦人たちが武士道を実践するのであれば、日本の国は安泰だ」とも言っています。

歴史に名を残す武将であっても、すべて母親が育てた人物であり、武士道教育も母親は母親が担っているのです。先週、鹿児島で講演を行ったのですが、薩摩には「郷中（ごじゅう）教育」というものがありまして、それを調べていましたら、一女性が薩摩の男らしい武士道を育てた」と記した資料に出合いました。

〈畠〉 女らしさが、男らしさを育てると。

〈石川〉 翻って、私たち現代女性は反省しなくてはならないと感じています。女性らしさを否定し、社会参加していろいろな功績を残したとしても、家庭を築くという一大事業がどうなっているのか…。

ちなみに私が述べている女性らしさとは「慎み」や「献身」「忍耐」といったものです。

〈畠〉 耐えることですか。

〈石川〉 はい。耐えることは、男気でもあります。静なる男気と言いますか。

そこにまだまだ達していない自分を、祖母には本当に申し訳ないと思っています。「忍耐」ということを祖母は言っていたと思います。そして祖母の人生を省みても、やはり「忍」の一字なのです。「しのぶ」ということです。忍びながら女性の道を守っていくということです。

〈畠〉 尽くして求めず、ですね。一般的にいう「愛」というのはギブ・アンド・テイクですが、「慈愛」はギブ・アンド・ギブだと思うのです。その精神が、武士道の中に昔あったのでしょうね。

尽くすことに女性の幸せ

〈石川〉 武士道には「惻隠（そくいん）の情」というものがあります。これは女性に当てはめた場合、憐れみの心をいかに持てるかです。昌さんのおっしゃられた慈愛です。慈愛とは母の愛に言い換えられるのではないでしょうか。我が子のためなら命をも投げ出す、尽くす心なのです。

女性というのは、尽くす存在だと思います。自らを捧げて尽くす中から自分の幸せを得ていくのではないでしょうか。男性もそうかもしれませんが、女性はよりそちらが強い。

人に尽くすことは、自分をなくすことではありません。究極の無私というのは、自分がはっきりとしていなくてきないのです。家族や大切な人のために尽くす中から自分らしさというものが、かえって出てくるのだと私は思います。

〈畠〉 見返りを求めない。

〈石川〉 見返りを求めると、かえってつらくなると思います。尽くすことそのものを喜びとできるようになりたいですね。

〈畠〉 最後は自分に返ってくるわけですからね。

〈石川〉 そうして真に幸せな女性が増えていけば、世の中がだれだけ明るくなるか知れません。

〈畠〉 なるほど、女性の修養の根幹が多少なりとも理解できました。

本日は示唆に富む素晴らしいお話をたくさんしていただきまして、誠にありがとうございました。石川さんの今後のご活躍を期待しております。

〈石川〉 こちらこそ、ありがとうございました。